会報

第96号

平成20年３月３日

新潟県特別支援教育研究会
事務局：新潟市中央区
白山浦1-207-3
鏡淵小学校内
発行：文久堂

慈しむ心

新潟県特別支援教育研究会　副会長
渡辺吉和

私が当会の副会長を仰せつかってから四年が終わろうとしています。

特別支援教育について殆ど知らなかった私は、これをきっかけとして多くのことを学ばせてもらったと感謝しています。

特別支援教育は今や、学級担任ならば学習指導や生活指導と並んで適切に対応しなければならない重要事項となってきましたし、管理職にとってもしかりです。

私は今から十数年前、小学校の教頭時代に出張授業で情緒障害学級の書写を二年間担当したことがあります。

その学級のある子どもが、風邪を引いて欠席した同学級の友達宛に書いた手紙を、担任が見せてくれました。

○○君お手紙です
風がふいている日
学校へきたけど
○○君はいませんでした
学校へ行かないで
おうちにいましょう

という意味のものなのですが、教わったばかりの漢字が使われていました。習いたての言葉も使って、多少のねじれや脱字がありながらも、表現のつたないものではありますが、子どもの心情が伝わってくるものでした。

私は、この手紙文は詩ではないかと感じました。自閉症であると言われた子どもなのですが、欠席した友達のことを気遣っているのです。

さて、ＮＨＫの大河ドラマ「風林火山」が終了しましたが、２００９年は、戦国の武将上杉景勝に仕えた名家老直江兼続をドラマにした「天地人」が始まるそうです。「愛」の前立てで有名な直江兼続。その「愛」の意味は、部下や領民を慈しむ仁愛の心なのだそうです。

私はこの本を読んだあと、ふと十数年前のこの手紙のことを思い出しました。直江兼続の「愛」とあのときの担任の子どもに接する態度を結びつけて捉えたからです。

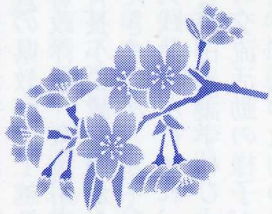
子どもに接する担任の限りない労りや慈しみの心が子どもに伝わり、子どもにも友達を気遣う心が育ってきたからだと感じました。

この担任の労りや慈しみの心は、私たちのように子どもに接しているものの心であり、教師の本質ではないかと感じています。

あのときの担任に教えられた感があります。

教職の終わりにあたり、感想を述べました。

お世話になり、ありがとうございました



平成二十年度 主な行事予定

五　月
　第一回理事評議員会
六　月
　各研究部研修予定集約
七　月
　会報九十七号発刊
八　月
　関ブロ群馬大会（五日）
　上越地区特別支援教育研究大会
　上越市南部大会（予定）
十　月
　全特連全国大会京都大会
　（二十九～三十一日）
十一月
　中越地区特別支援教育研究大会
　長岡大会（予定）
　下越地区特別支援教育研究大会
　新発田・北蒲・胎内大会
　（予定）
二　月
　第二回理事会
三　月
　会報九十八号発刊

各研究部の研修は、それぞれの研修計画に沿って実施します。

上越地区研究大会 糸魚川大会

大会主題に「一人一人の教育的ニーズに応じた支援の充実」を掲げ、平成十九年十一月二十二日、糸魚川市ふれあいセンター「ビーチホールまがたま」を会場に、上越地区特別支援教育研究大会糸魚川大会兼新潟県就学啓発推進会議を開催しました。

当日はあいにくの悪天候の中、最初に、分科会が行われました。学校関係者だけでなく、保護者や地域の方々を含め約二百名の参加者があり、六つの分科会では、分科会の協議題に沿って活発な意見交換が行われました。

1　学校・学級経営部会
2　小・中学校知的障がい児教育部会
3　小・中学校情緒障がい教育部会
4　言語・難聴教育部会
5　発達障がい教育部会
6　保護者・行政と生涯福祉部会

例えば、第五分科会では、今年度、糸魚川市に初めて設置されたLD・ADHD通級指導教室（まほろば教室）の実践が紹介され、糸魚川小学校では、別室のミラーを通して保護者が学習の様子を見ることができるなど、教室の新しい機能などにも言及されていました。また、保護者からも切実な質問・意見が出され、真剣な話合いが展開されました。最後に、指導者から、特別支援教育の三つの要素「理解・連携・共同」と関連付けて、柔軟な教育が必要であるといった指導がありました。

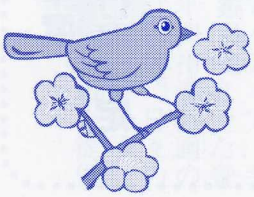
続いて全体会が行われ、開会式では、来賓の県教育庁上越教育事務所長大倉政洋様、糸魚川市教育委員会教育長小松敏彦様からご祝辞をいただきました。

次に、実践発表が行われ、糸魚川小学校と高田養護学校ひすいの里分校との交流活動の様子が紹介されました。二人の教諭の手慣れた説明と映像や子どもの声に引き付けられ、興味深く聞くことができました。ちなみに、この日の午前中に、ひすいの里分校の施設見学会が行われ、授業の様子や施設を自由に参観でき、好評でした。

さらに、県教育庁義務教育課指導主事中島秀晴様から「新潟県の特別支援教育の現状と課題」と題して、全体指導をしていただきました。特別支援教育の現状、就学指導・相談の現状、発達障がい児等への対応、医療的ケアの必要な児童生徒への対応、特別支援学校等の適切な配置等、学ぶべきことの多い内容でした。

特に、「人間の発達は連続体（スペクトラム）であり、支援の質や方法が大切になってくる」や「相手の中にいる自分、自分の中にいる相手に気付くことが大切だ」という締めの言葉が印象に残りました。

最後の閉会式では、例年各地区別に行われていた研究大会が、本年度は上越地区のみで開かれたことが紹介され、昨年からこの大会の準備に尽力してきた関係者は、努力してきたかいがあったと感じた次第です。また、今大会の成果を、今後の実践に生かしていくことができると思いました。



全特連全国大会佐賀大会

【大会主題】
地域で生きる子どもたちの今、そして未来―特別支援教育の課題と新たなる展開―

【期　日】
平成十九年十月二十四日～二十六日

【会　場】
佐賀県佐賀市文化会館大ホール、佐賀市内各学校等

【全体会】
○表彰式
全特連功労賞
＊本県からは松原誠前会長
○研究報告
◆開催地研究報告
「佐賀県立大和養護学校における特別支援学校のセンター的機能の充実に向けた取り組み」
報告者　佐賀県立大和養護学校
教諭　園田泰洋
◆全特連研究奨励賞受賞報告
「全校で取り組む『話す・聞く』『読む』『書く』の指導」
報告者　前愛知県立春日井高等養護学校
教諭　大竹智代
「盛岡名物
じゃじゃ麺屋を開こう」
報告者　岩手県盛岡市立仁王小学校
教諭　五安城正敏
○生徒発表
（和太鼓とダンス発表）
「響け！佐賀の風」
（中原養護学校、大和養護学校）

○行政説明
「教育行政の同行」
文部科学省初等中等教育局
特別支援教育課課長　永山裕二
○基調報告
「地域で生きる子どもたちの今、そして未来-特別支援教育の課題と新たなる展開」
全日本特別支援教育連盟
理事長　小出　進
○記念講演
「障害のある人を支える基本軸（共生活感）の構築を」
佐賀大学医学部
教授　齊場三十四　氏

【分科会】早期教育・難聴言語障害への支援など十八の分科会

【研究大会の概要】
全日本特別支援教育連盟全国大会佐賀大会は、障害のある子どもの教育は、「地域で支える」ことが課題になっている。その地域とは何か、地域はどうあるべきかを問い直し、地域と教育の望ましい関係を目指して、全国から様々な実践が持ち寄られた。その実践を通して、活発な協議が行われた。
大会当日は穏やかな秋晴れに恵まれ、八百名を超える参加者を得て、主題に沿った活発な意見交換がおこなわれた。
全体会の研究奨励賞受賞報告では、地域の名物を題材にした生活単元学習の実践が、活動の展開や学習計画を中心に発表された。
行政説明では、文科省から「特別支援教育を推進するための制度改正」「これからの特別支援学校の在り方」「小・中学校における特別支援教育」の三点について説明があった。特に「学ぶ場はどこであっても、ニーズのある子どもを支援するために、特別支援教育は全ての教員によって推進される」ことがあげられた。

全特連関ブロ大会東京大会

【大会主題】
「一人一人が豊かに生きる特別支援教育の推進」

【期　日】
平成十九年八月九日

【会　場】
中野ゼロホール（全体会）
中野サンプラザ（分科会）
中野区立第二中学校（分科会）

【記念講演】
「特別支援教育の本格実施に向けて」
講師　東洋大学
教授　宮崎英憲氏

【研究大会の概要】
全特連関ブロ大会東京大会は、これまで培ってきた専門性を共有し、さらに高めると共に、これからの特別支援教育のさらなる推進を目指して協議が深められた。
記念講演では　宮崎英憲氏（東洋大学教授）から、特別支援教育を推進するために、個別の教育支援計画の目的やポイント、特別支援教育コーディネーターの役割について詳しい説明があった。
第３分科会「発達障害」では、助言者の石橋悦子氏（東京都発達障害支援センター）から、発達障害は知的な遅れはなくても就労の場面で躓く場合が多い。特にＡＤＨＤやアスペルガー症候群、高機能自閉症などは「遅れ」と言うよりも「異質さ、アンバランスさ」にその問題がある。
そこで、本人の実生活に合わせたソーシャルスキルトレーニングが大切である。
就労について、本人の「トレーニングだけでなく。本人の周囲（職場や環境）を変えていくことも必要になる。」との助言を学校現場とは少し離れた視点からいただいた。参加者一同、一層理解を深めることができた。

平成十九年度各研究グループの報告

◇知的障害部

○研究主題
「特別な支援を必要とする子どもの健やかな成長をめざして」

○研修会名
知的障害部全体研究大会

○研修会の期日及び会場
・期日　平成一九年八月十日
・会場　県立生涯学習推進センター

○参加人数　百三十二名

○講演者　新潟いなほの会
代表　沼田夏子様

○会の概略と成果

【講演内容】

①軽度発達障害への支援について
身辺自立や社会性の育成、学習指導などの観点について、家庭と学校での適切な支援のあり方とは何か。子どもが自立に向けて必要な自己選択・自己決定スキルを年齢相応に身に付けていく必要がある。

②保護者と学校との連携について
親の会アンケートから、保護者への支援と学校への願いについて、お互いが「支援をしてこうやったらよくなった」といった好ましいかかわり方を共通認識することが大切である。

③新潟いなほの会について
会の趣旨や会員数、子どもの構成や保護者の悩みについて簡単な概略を受けた。

【成果】
将来を見据えた子どもの支援のあり方について、いろいろな角度からご講演をいただいた。
学校は子どもにとって社会自立に向けての第一歩であり、学校生活で楽しく過ごすことができること、また、学校と家庭が対等の立場で話し合える連携作りができること、すなわち、子どもを取り巻く環境のよさが健やかな成長につながるものであることが分かり、たいへん有意義な研究大会であった。

◇情緒障害部

○研究主題
「発達障害のある児童・生徒の理解と支援のありかた」

○総会及び研修会
・期　日
平成十九年八月二十四日(金)
・会　場
長岡市立中之島文化センター
・参加人数　三百名
・内容・時間
総　会　午後一時三十分～二時十五分
講演会　午後二時三十分～四時三十分
・講演会の概要
講　師
宮川医療少年院（三重県）
院長　小栗　正幸　様
演　題
「気になる子どもへの社会性指導の実際」
◇豊富な事例に基づいて、具体的に「個別的教育計画（ＩＥＰ）」の作り方や対応策・指導の方策をお話いただいた。分かりやすく、実践に生かすことのできる。お話であり、参加者は元気と勇気を与えていただいた

※今年度の研修会は、新潟県就学啓発推進会議（中越地区）と兼ねて実施した。情緒障害部員に限らず、各学校の職員、関係機関職員、育成会など関係団体に所属する保護者など、多くの方から参加していただき、学び合うことができた。

○幹事会
長岡市立千手小学校を会場に二回実施した。
・第一回　六月二十二日(金)
十一名が出席し、役員を選出して、事業計画や予算を審議した。
・第二回　十二月六日(木)
十一名が出席し、事業反省、決算、次年度の方向等について協議した。

◇言語・難聴部

○総会及び研修会
・期日　平成十九年七月三十一日
・会　場　上越市
レインボーセンター
・参加人数　六十二人
・議　事
①平成十八年度事業・会計報告
②平成十九年度事業・予算審議
③役員選出及び承認
④幹事会報告
・講演会Ⅰ
（講師）金沢大学教育学部
准教授　小林　宏明　様
（演題）
「吃音症状をもつ子の指導と支援」
・講演会Ⅱ
（講師）
上越教育大学心理臨床講座
教授　加藤　哲文　様
（演題）
「選択性緘黙児の指導と連携」

○幹事会
・期日　平成二十年二月二十七日
・会場　新潟市立鏡淵小学校
・参加人数　十人
・議　事
①平成十九年度事業・会計報告
②平成二十年度事業・予算審議

◇病弱肢体不自由部

○実践発表
・執筆者
肢体不自由学級担任者と病虚弱学級担任者
・内　容
生活単元学習の実際、教科指導や自立活動の指導の工夫、日常生活の指導のアイディア。手作り教材の紹介。役に立った資料教材の紹介。年間指導計画の形式、交流教育計画等。日々の実践を振り返ってなど、冊子にまとめて担任者間で情報を提供しあう。